

0 (ゼロ)からの風

2007(平成19)年7月1日鑑賞(なんばパークスシネマ)

★★★★



監督・企画＝塩屋俊／出演＝田中好子／杉浦太陽／豊原功補／菅原大吉／中島ひろ子／佐藤仁美／袴田吉彦／田口トモロヲ (ウィル・ドウ配給／2007年日本映画／111分)

……7月3日の交通事故に関する講演会のネタを兼ねて、この問題提起作をしっかりと鑑賞！ 2001年の危険運転致死傷罪の創設は、19歳の一人息子を奪われた母親の行動から……。他人ゴトには我関せずの風潮が蔓延する中、やはり社会を変えるには行動しなくっちゃ……。そしてまた、商業映画を楽しむのもいいが、飲酒運転・暴走運転撲滅のため、たまには広い社会的視点からこういう映画を応援しなくっちゃ……。

第4章

味わい深さはワイン以上？

タイムリーな公開に感謝！

私は1974年の弁護士登録以来、今日まで近畿交通共済と日本火災（現日本興亜損害保険株式会社）の弁護士として、数多くの交通事故の示談・裁判事件を処理してきた（被害者の感覚からは、この「処理」という言葉自体が気に入らないだろうが……）。ピーク時には両方で年間約150件を処理していたもの。また、2005年には『いまさら人に聞けない「交通事故示談」かしこいやり方』（セルフ出版）を出版した。

そんな活動のおかげか、今年は近畿交通共済からの依頼で、運送会社の事業主・運行管理者を対象とする交通事故防止に関する講演会を4回やることになっており、来年も4回が予定されている。その第1回が7月3日に予定されており、既にレジメや資料を配布していたが、そんなタイミングに合わせるかのように、6月30日から大阪のなんばパークスシネマで『0 (ゼロ)からの風』が公開されることになった。そのため、7月1日（日）恒例となっている午前中のフィットネスクラブでの運動を終え、ひと休みとひと仕事を終えた後、6時40分からの回を観ることに……。すると、ちょうど塩屋俊監督とこの映画のモデルである鈴木共子さんの舞台あいさつにも遭遇。こ

んなタイムリーな公開をしてくれたことに感謝……。

『交通死』と『ザ・交通事故』

交通事故の賠償問題に関する実務書は洪水のように溢れているが、「命はあがなえるか」というテーマで根源的な問題提起をしたのが、二木雄策著の『交通死』という岩波新書（1997年）。他方、交通事故の処理の中で必然的に露呈されてくるさまざまな問題点にメスを入れた面白い本が『ザ・交通事故』（別冊宝島編集部編、1999年）。

この両者とも、交通事故の示談・裁判に登場する弁護士についてさまざまな指摘をしている。とりわけ『交通死』では、弁護士について「損害賠償を金銭で行うことが『法律で決められている』として、そこに一片の疑いをもさしはさまないのは、法律を万能だとする形式論者の取るべき態度ではあっても『人間』のそれではない」と手厳しい。

『0（ゼロ）からの風』は、被害者茂木零クン（杉浦太陽）の母親茂木圭子さん（田中好子）の闘う姿を描くための映画だから、その応援者として、報道記者の上杉孝之（田口トモロヲ）は登場するが、弁護士は全く登場しない。したがって、この事件の加害者野崎順一（袴田吉彦）の刑事事件の弁護人となった弁護士が、彼のためにどんな主張（弁解）をし、また無保険だった野崎の賠償問題をどのように処理したのかは、映画の中では全く描かれていない。この映画の狙いからすればそれは当然だが、『交通死』や『ザ・交通事故』を取りあげるまでもなく、現実の交通事故の刑事・民事の「処理」については、どんな弁護士が、どんなスタンスで活動するかはかなり大きなウエイトをもっているから、この映画でも、少しは弁護士の姿も描いてほしかったと思うのだが……。

2000年4月、無車検・無保険・無免許・飲酒の車によって……

この映画は実話に基づいたフィクションだが、映画の中の事故が発生したのは実話と同じ2000年4月。一浪の後、見事早稲田大学に入学したばかりの被害者零はほぼ即死。加害者は、飲み会からの帰り道の途中、飲酒検問から逃げ出した野崎。野崎は追跡してきたパトカーをいったん振り切り、無灯火で逃走中、零をはねてしまったというわけだ。

零の父親晋（豊原功補）はピアニスト、母親圭子は造形作家だが、晋はガンのため49歳の若さで死亡し、その後、零と圭子は互いに零クン、圭子さんと呼び合う姉・弟

のような奇妙な(?) 関係だった。「夕食はいらないから」と電話してきた息子の帰りがあまりに遅いと思いながら、ついソファの上でうとうととしていた圭子に突然かかってきた電話は……?

業務上過失致死傷罪 vs. 殺人罪

車は便利なもので現代社会に欠かすことのできないものだが、半面凶器にもなりうるもの。そして、いくら細心の注意を払っていても、便利さと交通事故の危険はいつも隣りあわせで、誰もが交通事故の加害者にも被害者にもなりうるもの。そんな大前提のうえで、刑法は交通事故については業務上過失致死傷罪によって処罰しており、その最高刑は5年以下の懲役もしくは禁錮または100万円以下の罰金。他方、故意犯としての殺人罪は死刑または無期もしくは5年以上の懲役だから、その差は歴然……。

今なぜ、この映画が……?

私が7月1日に舞台挨拶で見た鈴木共子さんがこの映画の主人公茂木圭子のモデルとなった女性(母親)だが、さすが「息子の人生を代わりに生きるのだ」と決心して、早稲田大学入学のための受験勉強を開始し、3回目(?)の挑戦で見事合格しただけのことはあると納得できるしっかりした女性……。

塩屋俊監督がこの映画をつくろうと決心したのは、2003年に、交通事故で息子を失った母親が早稲田大学に合格したというニュースを見たことがきっかけらしい。塩屋俊監督の心には、その瞬間に「この人の挑戦を映画化しなくてはならない」という衝動が生まれたとのことで、それがすべての出発点。もちろん商業主義路線からはこんな重たい映画は煙たがられるのはあたり前で、資金集めが大変なことは想定範囲内。それを何とか乗り切って、4年間の苦労の末に『0(ゼロ)からの風』が完成したわけだが、私をもっと早くそんなニュースを聞いていたら、ちゃんと私も寄付していたのに……。そんな思いもあり、7月3日の講演で私は今日の講演料はそのままこの映画の今後の上映のための資金に寄付する旨を宣言した。私の2時間の講演料がいくら位かは想像におまかせするが、宣言したことはきっちり履行しなければ……。

刑法改正は、1人の母親の第一歩から……

刑法に新たに創設された危険運転致死傷罪は、2001年12月25日から施行された。

この構成要件は、

① (a) アルコールまたは薬物の影響により正常な運転ができない状態で、(b) 進行を制御することが困難な高速度で、またはその進行を制御する技能を有しないで、(c) 人または車の進行を妨害する目的で、走行中の自動車の直前に進入し、その他通行中の人または車に著しく接近し、かつ重大な交通の危険を生じさせる速度で、(d) 赤色信号またはこれに相当する信号を殊更に見逃し、かつ重大な交通の危険を生じさせる速度で、

②四輪以上の自動車を走行させ、というもので、故意犯としての犯罪類型。

またその刑罰は、①人を負傷させた者は15年以下の懲役（平成16年12月末までは10年、平成16年刑法改正（平成17年1月1日施行）により15年に）、②人を死亡させた者は1年以上の有期懲役（つまり20年）（平成16年12月末までは15年、平成16年刑法改正（平成17年1月1日施行）により20年に）という重罪。

ちなみに、2003年10月7日付産経新聞によれば、千葉地裁松戸支部は、飲酒運転で歩行者5人を死亡させ、危険運転致死傷罪に問われた元パチンコ店員、和島豊被告（53歳）に対して、はじめて同罪の最高刑に当たる懲役15年を言い渡したとのこと。

刑法の交通罰則の強化は1968年以来だが、それを実現させる第一歩になったのが、零クンのお母さんによる刑法改正の署名運動の開始だったことが重要。コトなかれ主義で、他人のコトには我関せずという風潮がはびこっている現在、1人の女性によるこの第一歩から「危険運転致死傷罪」が創設されたということの意味を、じっくりとかみしめてみる必要があることは明らかだ……。

マスコミの役割は……？

この映画には、暴走ドライバーへの厳罰を定める新たな法律の制定に動き始める圭子を、マスコミの立場から追う上杉が登場する。司法関係取材する記者は、いつもどんなスタンスで、どんな視点から問題提起すべきかを悩みながら行動しているはずだが、この上杉の取り組みについては、それは意外に簡単。なぜなら、「犯罪被害者の支援」と同じように、暴走ドライバーに対して厳罰を求める交通事故被害者の遺族の声は、本来的に誰にでも受け入れられやすいものだから……。

ちなみに現在、広島高裁に差し戻された光市の母子殺害事件の審理における安田好弘弁護士ら21名の弁護団の活動が、マスコミから総攻撃を受けているが、この弁護



©「0（ゼロ）からの風」製作上映実行委員会

第4章

味わい深さはワイン以上？

団の活動の意味や意義をアピールすることは、本来的に難しいもの……。私は弁護士としてこの弁護団のような活動をする意思は全くないが、他方、それをやる弁護士が必要だと確信しているし、社会の非難を受けながらそれをやっている彼らに対して「エライなあ」と思っている。

ホントはさまざまな面で価値観の相違が現実化してもおかしくないところだが、この映画では上杉は圭子と理想的な距離感でつき合っているから、何の問題も発生せず、マスコミの役割については何の疑問点も提示されていない。しかし、ホントはマスコミの役割はこんな理想形ばかりではないということを、頭に入れておく必要があるのでは……？

署名運動の広がり……？

交通事故による死亡者は、「交通戦争」の時代であった1970年には年間1万6765人だったが、その後さまざまな取り組みによって徐々に減少し、2005年には6871人に、2006年には6352人になっている。したがって、交通事故による死亡者の遺族はそれと同じ数だけ存在するわけだが、暴走運転による被害者の遺族として圭子の署名運動に主体的に参加したのは、岡野夫婦（菅原大吉、中島ひろ子）、篠原美由紀（佐藤仁美）など。もちろん、そのリーダーシップをとったのは、最も行動派で性急派（？）

の圭子だったが、その行動力のおかげで1年余の間に署名数は約37万人に達することに……。

世の中には志を同じくして結成される任意団体は多いが、途中からその方向性や運営をめぐる内紛が発生することはよくあるもの……。圭子たちの署名運動をめぐるでも多少そういう芽が見られたが、映画ではそれは深く追及せず、プラス面のみを強調……。しかし、マスコミがいつも理想的な形で応援してくれるわけではないことと合わせて、組織の方向性と運営については、よほど細心の注意を払っていかねれば……。

■加害者の人物像は……？

映画の冒頭、派手にはしゃいでいる若者たちの姿が登場する。結婚式のパーティーが終わったところらしいが、さて彼らはこれからどんな行動を……？

零クンを暴走運転ではねたのは、この中の若者の1人。つまり、加害者野崎はしたたかに飲酒したうえ、車を運転して友人を送り届けそのまま自宅へ帰ろうとしていたらしい……。この映画は、野崎の「業務上過失致死罪」についての裁判の様子をほとんど紹介しないから、法廷で彼がどんな陳述をしたのかはわからない。しかしきっと、「反省しています。2度とくり返しません」と供述しているはず……？

そんな野崎が刑期を終えた後、保護司を通じて「遺族に謝罪したい」と申し入れてきたのは、私には何とも意外……。これが現実なのか、それとも脚本によるものかは知らないが、圭子の自宅で圭子に対して手をついて涙ながらに謝罪する野崎の姿も、私には意外……。ちなみに、これに対する圭子の言葉は、上杉に言わせると「すごく厳しいもの」だそうだが、私には当然と思えるもので、「私は絶対にあなたを許すことはできません」というもの。

興味深いのは、それに続けて圭子が「私たちは生命のメッセージ展をやっている。遺族たちの突き刺さるような視線の前に立つのはつらいだろうが、是非それに参加してほしい」と申し出たこと。それに対して野崎が「必ず参加します」と涙ながらに約束したのも意外だったが、さて、彼はホントに生命のメッセージ展に参加するのだろうか……？

塩屋監督が加害者野崎をどういう人物像として捉えているのかについて、交通事故の加害者の刑事弁護を何度も担当してきた私は大いに注目していたが、この映画から

観る限り、野崎の人物像はあまりハッキリしないもの……？ なぜ野崎について、こういう描き方にしたのかについては、直接塩屋監督とディスカッションしてみたいものだが……。

生命のメッセージ展とは……？

交通事故被害の悲惨さや、それによって愛する夫や妻そして息子や娘を失った遺族の気持は、誰でも抽象的にはわかっているつもりだが、やはりそれは所詮他人ゴト……。それは誰も否定することができないはず……？

しかしそれでも、失った生命の重さを少しでも感じてもらいたい、そして2度と同じような事故や事件で貴い生命を失うことがないように飲酒運転・暴走運転を撲滅してもらいたい、そんな思いで圭子たちが始めたのが生命のメッセージ展だ。これは、亡くなった交通事故被害者の等身大の人型と遺品の靴を巡回展示するもの。

そのパネルを見ながら人間の生命を赤い糸で繋いでいく。そんな1つの行動から、少しでも生命の貴さを実感してもらうことができれば、こんな行動は大きな意義をもつはず……。

全国巡回上映への協力を……

長年『キネマ旬報』を読んでいると、そこで毎回レポートされている興行収入ランキングTOP10がいつも気になるようになってきた。最近の邦画で目立った興行収入をあげているのは、①『舞妓 Haaaan!!!』(07年)の20億円目標、②『大日本人』(07年)の10億円目標など。これらは、大量宣伝をバックに数多くのスクリーンで公開されるのだから、大きな興行収入をあげて当然だが、『0 (ゼロ) からの風』は大阪ではたった1スクリーンのみ。もっとも、これが今年4月19日にオープンしたばかりの、なんばパークスシネマだったことは驚きだったが……。そんな『0 (ゼロ) からの風』については、これから全国を巡回しながら上映し、製作費を回収していくのは大変な作業。勝手にそんな心配をしていたところ、『0 (ゼロ) からの風』のウェブサイトには、「寄付・協賛にあたって」というタイトルで、1枚1000円(税込)で「映画製作協力券」の購入申込みの案内がされていた。1人でも多くの人にこのチケットを購入していただき、『0 (ゼロ) からの風』の全国巡回上映が成功することを心から期待したい。

2007(平成19)年7月4日記